

研修医プログラムを修了して

プログラムA研修歯科医を終えて

歯科臨床教育学分野大学院1年
岩本 佑 耶

昨年度まで新潟大学医歯学総合病院歯科医師臨床研修プログラムAで研修を行い、現在新潟大学大学院歯科臨床教育学分野へ進学いたしました、岩本佑耶（いわもとゆうや）と申します。歯学部ニュースの執筆のご依頼を受け賜りましたので、僭越ながらご拝読いただけると幸いです。

執筆にあたり、これまでの歯学部ニュースに掲載されている同項目を拝読させていただきました。重複するのも退屈かと思われるので、今回は自身の話を織り交ぜながら、プログラムAについてのお話をさせていただこうと思います。

私の研修歯科医生活は、一言でいうと「充実」そのものでした。自宅に帰れないほど多忙な日々を送るのも嫌だし、かといって何もしないで暇な日々を送るのも嫌だと思い、自身で手を動かし、なおかつ指導医の手厚いサポートを受けられる同研修プログラムを志望いたしました。入局に関する一連の説明を受け、配当患者を確認すると衝撃の40名。昨年度の研修歯科医は20名以上いたのですが、私達の代では13名しかいなく、研修歯科医一人当たりの患者の数が大幅に増えたのです。戸惑いもありましたが、同時に自身のスキルアップを確信しました。想像していたよりも多忙な日々を送り、研修歯科医ながら1日に3名の精密印象採得を実施し、その後ラボサイドでの4つのボクシングを行った日は今でも忘れません。そして、自分で製作した補綴物を装着した後の患者さんの笑顔は、一生忘れることはないと思います。

同研修プログラムの研修歯科医は、自身の患者さんの治療だけではなく指導医やほかの研修歯科

医の患者の急患対応をすることもあります。入れ歯が壊れたから治してほしい、という患者さんに対して入れ歯の修理をすると、患者さんは治った入れ歯をつけて笑顔でご退出されます。そして、私も笑顔でお見送りします。

研修歯科医を通して、私はたくさんの方の笑顔を見てきました。心から喜んでくれる方を見ると、自然とこちらも笑顔になります。私にとって「充実」した歯科医師生活というのは、患者さんの笑顔で囲まれている生活なんだということに気づかされました。そして、同研修プログラムを選択したからこそ、たくさんの方と出会うことができ、指導医の指導の下に治療を行うことで、患者さんの笑顔を見ることができました。

COVID-19の規制が緩み、脱マスクと謳われていますが未だに多くの方がそれを実行できずにいます。それでも私たちは患者さんの目を見ることで、笑っているのかどうか判断することができます。そして、その笑顔のマスクの下には、私が製作した補綴物があるのです。



研修歯科医同期と先生方（著者は最奥右から3番目）

臨床研修を終えて

包括歯科補綴学分野大学院1年

山田果歩

「良い義歯が作りたい」

臨床実習の最中に抱いた漠然とした憧れを胸に、臨床研修Bコースを希望し義歯科の門戸を叩いたのが昨年4月のことである。あっという間に過ぎた研修期間は、もう学生ではない自分と歯科医師として半人前にもなれていない自分との狭間で、悩み立ち止まりながら一步一步、そんな1年間だった。

字面ばかりを追いかけてきた生活から一変、乏しい知識とごくわずかな経験を頼りに診療の流れをイメージして臨むが、いざチェアに座ると想像以上に何もできない自分に気付く。良い概形印象とは何か？何をもって筋形成は完了するのか？疑問符で埋め尽くされた外来で、ましてや千差万別の口腔内で臨機応変に対処するためのプランBの準備などでできていなかった。焦り迷い、不十分だと理解しながらも、チェアタイムに余裕がなく指導医に助けを求めてしまう自分を不甲斐なく思うばかりだった。そんな反省を繰り返す日々の中でも充実感を持って前に進めたのは、筆者の疑問にとことん付き合い、義歯治療の面白さを教えてくださった先生方の存在が大きい。そして研修医の筆者が治療を行うことを受け入れてくださった患者さんのご協力があったからこそその半年間だった。

高齢社会の中で口腔管理の重要性が高まる昨今の状況を受け、地元新潟で病院歯科の役割を学びたいと考え、後半は新潟中央病院の歯科口腔外科

で研修させていただいた。「足を悪くしたから…」としばらく歯科受診から遠のいていた患者さんが非常に多く、歯周状態の悪化はもちろん、適合不良となった義歯を無理して使用している方は少なくなかった。周術期口腔機能管理やMRONJ予防を足掛かりに、こちらから積極的に介入して少しでも口腔環境を整えること、そして退院後も継続した口腔管理を行えるよう地域と連携すること、病院歯科の在り方を学び、貴重な経験となった。

もう一つ、義歯科で共に研修を行った2人の同期のことに触れておきたい。成功や失敗、学び得た知識など、毎日顔を合わせる中で自然と共有できる関係性でいられたことに感謝している。3人揃って人工歯排列に苦戦した日々が懐かしい。別々の道を選んだ我々の今後の歯科医師人生のふとした瞬間に、あの半年間を思い出す日が来たら…そう願ってやまない。

1年後に包括歯科補綴学分野の大学院に進学した現在の筆者をかつては想像していなかったが、「良い義歯を作りたい」という当初の思いは変わらず、1年間の研修期間を経てさらに強いものになったことは間違いない。マイペースで不器用な筆者とのディスカッションに毎度お付き合いいただいているオーベンには相変わらず頭が上がらない毎日であるが、去るWBCで日本中を虜にしたO谷選手の言葉を借りるならば、いつか憧れを捨て、症例について白熱した議論を交わせるようになっていたい。今は笑われてしまいそうだが、当面は義歯科の師匠たちの背中を追いかけて日々邁進したい。最後に、臨床研修でお世話になった全ての方へこの場を借りて感謝申し上げたい。ありがとうございました。